

春



## 井月さんの俳句の四季

春・夏・秋・冬・新年のそれぞれの句から

季語を見つけて井月さんの俳句を鑑賞してみよう。

何度も声を出して詠んでください。

きつと気づくことがあるはずです。

井月さんが一生をかけて詠んだ句です。

### 山里や雪間を急ぐ菜の青み

季語：雪間

春の遅い山里もようやく暖かくなって日ざしも濃くなり、積もった雪が競うように消えてまだらになつていく。昨秋に撒きつけた菜も春の訪れを待っていたかのように伸び始め、青みを増してきたと、新鮮な春の色に喜びを感じる井月さん。





## 菜の花の径を行くや旅役者

季語：菜の花

江戸時代の終わり頃から農村に歌舞伎や人形浄瑠璃が流行した。伊那にも中尾歌舞伎や古田人形芝居がある。村人が自ら演じるだけでなくプロの芝居を招くことも多かった。旅役者の一行が菜の花の咲いた小道を行くよと、当時の田舎の風景を詠った句。

## 初午や蚕の種も祭らるる

季語：初午

初午は二月の最初の午の日。この日、村の神社で初午祭りがあった。養蚕農家はお蚕さまの豊作を祈って蚕の種にも祈りを込める。馬とお蚕様の結びつきは深い。蚕様の発祥伝説とも関係する。



## 春風や碁盤の上の置手紙

季語：春風

碁を打ちに訪れたが、約束した主は急用で出かけたのかお詫びの手紙が置いてあった。あるいは、碁を打ちさして所用のため中座した主を、待ちくたびれて置き手紙をして帰ったとも取れる。「春風や」を「遅き日や」とした句も残されている。

## 旅人の我も数なり花ざかり

季語・花

花といえば桜の花をさした。花盛りの中を歩きながら、我も旅人の一人だということを改めて感じているような井月さんである。一八七六（明治九）年の春に奉納した伊那市手良中坪、清水庵の俳額に記されている。

## 柳から出て行舟の早さかな

季語・柳

伊那の大地を貫く天竜川は、日本の三急流の一つ。そこを流れ下る舟、岸辺の柳の木を通過するとよけい速く感じられる。井月さんの近代俳句を思わせるような写生句である。

## 降とまで人には見せて花曇

季語・花曇

駒ヶ根市の光前寺の祭りの当日詠んだ句。今にも雨が降りそうな空模様を参拝の群衆が見上げる。移りやすいこの頃の空模様、どうやらギリギリもちこたえているようである。



夏



霞むべき山は放れて夏木立

季語・夏木立

霞むはずの山は遠く離れて、暑い夏の日差しをさえぎって青葉の生い茂った生気盛んな夏の木立が頼もしい限りである。これも井月さんの写生句である。井月さんが尊敬した芭蕉に「先たのむ椎の木も有夏木立」の有名な句がある。

泥くさき子供の髪や雲の峰

季語・雲の峰

暑さも気にせず野に川に一日遊びまわった子供たちの髪は泥まみれ汗まみれ。見上げると、夏空に高い山の峰のようにそびえる入道雲。信州に足を踏み入れた井月さんの中野市に残された二十代後半の最も早い時期の句。



ひとつ星など指さして門すずみ

季語：すずみ

ひとつ星は宵の明星、夕方最初にただひとつ出る金星。暑かった日が落ち、門のあたりになんとなしに人々が集まって夕涼みをしていて、夕空に輝き始めたひとつ星を指さして皆で見ている。



## 水際みずぎわや青田あおだに風かぜの見みえて行く

季語…青田

水路から田んぼに注ぐ水音。水を得、陽光を浴びてすくすく育った稲の青い葉先が、風になびいて移っていくのは風が吹き抜けて行くのだ。今はすっかり拓けた伊那市西箕輪大萱で詠んだ夏の光景である。

## 淵明えんめいも李白りはくも来きたり涼すずみ台だい

季語…涼み

有名な詩人陶淵明(三六五〜四二七)も李白(七〇一〜七六二)も暑さを避けて涼み台に来ている。井月は空想の中にいるのだ。井月さんは古今東西の古典にも通じていた。

## 玉苗たまなえや乙女おとめが脛はざの美うつくしき

季語…玉苗

玉苗の玉は美称、お田植えの早苗のこと。玉苗を手に乙女がからげた裾から見える白いすねの美しいことよ。井月さんには、子どもや乙女の美しさをさりげなく詠った句も多い。

## 朝露あさつゆのままで手たむ向けん蓮はすの花

季語…蓮

美しく咲いた蓮の花は朝露を置いてみずみずしい。このままそっと切って霊前に手向けようとの死者を弔う句。亡くなった人への追善句とともに、子供の誕生を祝う句も多く残されている。